



建築環境学が専門の宿谷昌則東京都市大教授が、12年の日本建築学会教育賞（教育業績）を受賞した。環境配慮型の建築とそれに応じたライフスタイルの形成を目指した住環境教育のプログラムや教材を開発。子どもから一般市民、建築の専門家まで幅広い対象を

相手に実践し、建築環境への素養を深めることに貢献したと評価された。宿谷氏に住環境教育に込めた思いだけでなく、東日本大震災で顕在化したエネルギー問題に関する教育のあり方について語ってもらった。

（編集部・山口裕照）

建築学会教育賞を受賞



（しゅくや・まさのり）53年東京生まれ。76年早大理工学部建築学科卒、82年同大学院博士課程修了。83～85年日建設計を経て、85年武蔵工大（現東京都市大）工学部建築学科専任講師、88年工学部建築学科・大学院工学研究科助教、95年教授、98年同大環境情報学部環境情報学教授、01年から大学院環境情報学研究科教授を兼務。91年に空気調和・衛生工学会論文賞、01年に日本建築学会論文賞を受賞。主な著書に『数値計算で学ぶ 光と熱の建築環境学』『自然共生建築を求めて』『エクセルギーと環境の倫理—流れ・循環のデザインとは何か—』。

住まい手が良い環境をつくる

——一般向けの住環境教育に取り組んだ経緯を。
「環境情報学部を立ち上げる仕事に関わったのがきっかけでした。工学部建築学科で建築環境学を教えるようになって10年くらい経ちました。面白さもありましたが、建築の狭い世界に閉じこもっているような感じもしていました。そんな時に環境情報学部の立ち上げに関わり、建築外の専門家との付き合いが増えたことで外とつながることの重要性を痛感しました」
——どのようなことを感じたので

宿谷 昌則氏に聞く （東京都市大教授）

「人は1日のうち9割ぐらいの時間を建築の中で過ごします。でも建築の大切さについては一般の人たちに十分知ってもらえていない。もっと建築のことを知ってもらわなければ、建築の専門家が目指すものや取り組みが広がっていきません」
「建築外の先生と付き合い始めて感じたことがもう一つあります。それは、専門的な話になると専門用語しか使えないという語彙のなさ、表現力の貧しさです。建築語では一般の人に説明できないし、極端に言う

とごまかすことになる。本当に分かってもらうには、専門用語ではなく、普通の言葉で語り掛けることが大切なのです」
——住まいをテーマにした環境教育をいつごろから始めたのですか。
「エネルギーをあまり使わずに良い環境をつくるには、住まい手側が建物を使うのが非常に大事です。そこにフォーカスした教育がないことに気づき、また環境情報学部での体験も背景にあって90年代中ごろから、研究として成り立つのか、普遍的なことが発見できるのか、な

どと考えるようになったのか、子ども向けや「具体的にいったのは、99年に実施したワークショップです。子どもたちの建築環境に対する意識がどう変わり、どのように形成していくかを研究としてまとめました。これを皮切りに7、8年、さまざまな研究や活動が続き、学校のエコ改修と環境教育に関する環境省のモデル事業にも携わりました。こうした活動を通じて、住まい手に建築環境を分かち合おうことの大事さを確認できました。何より人のつながりが生まれたことが財産で、今回の受賞は代表としていただこうという気持ちです」
——具体的にどのような教育を行っているのですか。
「何か一つの教育プログラムがあるわけではありません。一例を挙げると、家庭科の授業で使える住まい

教育に関する教材をつくりました。家庭科の先生の大半は「衣」か「食」が専門で、「住」をきちんと学んだ方はまれです。教科書のページ数も『住』については極めて少ない。家庭科で住まいをテーマにした環境教育を行うことは大変意味があります。さらに家庭科の中で閉じているのではなく、理科や算数にも広げていくことが大事だと思います」
「光や熱、空気などの振る舞いを実感できる模擬実験セットの開発にも取り組みました。基本的な実験を

「学生たちに原発の授業をした上で感想文を書いてもらいました。すると、『原発はクリーンなものだと教わり、3・11までそう思っていた』と書いた学生がかなり多く、洗脳教育が行き渡っていることにショックを受けました。さらに驚いたのは、『もっと安全な原発をつくってほしい』という学生がいることでした。自分自身の頭で考え、判断することをしてほしい。これは非常に危険なことだと思います。自分で考える力を養う教育が重要だと思っています」。